



ベルリン。 1991年12月。

3月15日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

3月15日のおはなし「ベルリン。1991年12月。」

ぼくが暮らしていた頃のベルリンは、ひとことで言って宙ぶらりんな収まりの悪い街だった。あの感動の壁崩壊から2年ほど経って、みんな、はっきり口に出しては言わないものの、内心果たして東西がひとつになって良かったのだろうかという疑問を感じ始めていた時期だった。いや。誰も口に出さなかったわけではない。その疑問はいろいろな形で目に見えるようになっていた。

ブランデンブルク門の前には外国人観光客向けのみやげ物屋が並んでいて、一番人気はもちろん、ベルリンの壁の破片だった。本物か偽物かよくわからないものの、ベルリンの壁の破片と称するコンクリートの破片は飛ぶように売れた。落書きの跡が残っているものはとりわけ高い値段で売れていた。でもある日、ぼくは見てしまった。ぼくが住んでいたハッケルシェマルクトの下宿の窓から、裏の空き地で数人の若者がコンクリート片にラッカーで色を付けているのを。それからというものブランデンブルク広場でコンクリート片を買って喜んでいる観光客が気の毒で仕方なかった。見ようによってはこれも、あの壁崩壊がもはや神聖な出来事という位置づけではなくなっていたことの象徴だろう。

Tシャツも人気があった。ぼくが住み始めた最初の頃、壁崩壊から間もなく1年というころはまだ、東西ドイツの統一を祝福したモチーフのものが一番人気だった。ニュースで使われたあの有名な写真をそのまま使って、ベルリンの壁につるはしを打ち付ける男の姿が胸に大きく印刷されたもの。統一ドイツの地図、抱き合う東西のドイツ人、ホーネッカー書記長や共産党幹部への辛辣なメッセージなどなど。ところが間もなく、あるTシャツが爆発的に売れ始めた。そこにはこう書かれていた。「ベルリンの壁をもう一度」。旧東側の経済状態が予想以上にひどくてお荷物になり、西側諸国の優等生だった旧西ドイツの足を引っ張っていることが明らかになった時期だった。やがてそのメッセージはさらに変化し、さらなるヒット商品となった。「ベルリンの壁をもう一度。ただし今度は2倍の高さで」。

あわてて注釈を付けるが、今はもう、そんなのは過去の話だ。今そんなTシャツを並べたって売れはしない。今ベルリンで一番いけている街はどこだというと、驚いたことにあの頃ぼくが住んでいた旧東エリアなんだそうだ。若い人が集まって、新しいことが次々に見つかって、面白いスポットが出現するのは決まって旧東エリア。ぼくがいた頃にファッションブランドやらHMVやら新しいショップが続々出現して賑わっていた旧西エリアは斜陽気味とまでは言わないにしても、いささか精彩を欠いているらしい。

当時は違った。

旧東エリアは踏み込んだだけでいつかどこかの別な時代に入った気がしたものだ。建物のせいなのか、街路の敷石のせいなのか、街全体の色もくすんでいて、重く、灰色の世界だった。何十年か時間が遡ったような、古い写真アルバムの中に踏み込んだような、そんな印象すらあった。そんな中にトルコ人街ができていて、当時のぼくはそこに食事をしに行くのがささやかな楽しみだった。

中でもギュネイの食堂がお気に入りだった。ここのムサカは最高だった。ムサカ。ナスとジャガイモとカリフラワーとトマトでひき肉を煮込んだシチューとでも言えばいいだろうか。なぜだかわからないが、どことなく懐かしい味がしてついつい頼んでしまった。またムサカかい、と店の親父、ギュネイさんによくからかわれた。レンズ豆のスープ「チョルバ」や、魚のサンドイッチもなかなかうまかった。水で割るとまっ白に濁るトルコの酒「ラク」や、「エフェスビール」をテーブルに並べ、店の常連とお喋りしながら食べるのが仕事帰りのつかの間の楽しみだった。

トルコのデザートは甘すぎてぼくには合わなかった。チャイも砂糖を大量に入れるので閉口した。けれど夕食後に、その甘過ぎるデザートと甘過ぎるチャイを頼んでねばったのにはわけがあった。デザートを持って来るのがギュネイさんの娘のハリカの仕事だったからだ。ギュネイさんの食事が美味しかったことに嘘偽りはないが、ぼくがこの店に通い詰めた理由がハリカだっ

たことは隠してもしょうがないだろう。

ハリカはよく笑う可愛い女の子だった。髪はアジア人のように黒かったが目は明るいブルーで、肌も白かった。ふっくらした頬にえくぼを浮かべ、はにかんだような笑顔を浮かべるのだが、言うことの中身は結構辛辣で、それがまた常連客には大受けだった。

もうすぐ年末というある日、ぼくはハリカをデートに誘い出すことに成功した。近くの広場に移動遊園地とサーカスの出し物がやってきていたので、一緒に観に行かないかと誘ったのだ。その場所に元は何があったのか知らないが、そこは土がむき出しの広場で、石畳でおおわれたベルリンしか知らないぼくにはちょっとした異空間に思えた。サーカスの馬たちは土煙を上げて走り回り、男たちは曲乗りをしてさかんに喝采を浴びていた。ぼくらは曲芸を眺め、あやしげなテントのショーを冷やかし、屋台でカレー粉とケチャップをからめた輪切りのソーセージとビールを頼み、一日楽しんだ。

夕方になって、手伝いがあるからというハリカを店まで送りながら、ぼくは幸せな気分であっただけだった。見るとサンタクロースの格好をした男が、何やら手のこんだアクセサリーを売っていた。ぼくはうきうきした気分ですべてを買おうとハリカにプレゼントした。ハリカは困ったような顔をして、受け取ったものかどうしたものかというしぐさをした。いきなり男からプレゼントをもらって困っているのか。なんて初々しいんだろう。

そう思ったぼくは、昼間からしこたまビールを飲んで羽目を外したい気分だったこともあり、普段なら言わないようなことを口にした。「ぼくにとっては今日の一日が素晴らしいクリスマスプレゼントだったんだよ。だから君にもプレゼントさせてくれよ」

ますます困ったような表情になりながらハリカは何とかそれを受け取ってくれた。何か言いたそうにしている彼女にぼくは、いいからいいからと言って、それから不意に思いついて「ハリカ、いままで一番嬉しかったクリスマスプレゼントは何？」と尋ねた。

その時の彼女の表情を、ぼくは今でも忘れることができない。後になってぼくはその表情を何度も思い返すことになる。でもその日、その時のぼくは、彼女の表情の意味をまるっきりわかっていなかった。

ハリカはすぐに頬にえくぼを取り戻すと、ぼくが渡したばかりのプレゼントを持ち上げてみせた。これがそうだ、というように。ぼくはもうすっかり有頂天になって、馬鹿みたいに笑いながら彼女をギユネイの食堂まで送り届けた。

でもそれが、ぼくがハリカと会った最後の日だった。

どうして気づかなかったんだろう？ ぼくは何度も何度も後悔することになる。もちろん、ハリカはイスラム教徒だったし、ギユネイさんは見かけによらず信心深いムスリムだった。イスラムにクリスマスはない。おまけに、ぼくがハリカに与えたアクセサリーは十字軍のモチーフのもので、よりによって十字軍のモチーフのもので、当然もっとも避けなければならないものだった。言い訳になるが、買った時にはそれが十字軍のモチーフだなんて気づかなかった。ただ手が込んでいて綺麗なアクセサリーだとしか考えていなかった。でも、気づかなかったから許されるというものではない。

ぼくはギユネイの店に出入りすることができなくなり、ハリカとは二度と会わせてもらえなかった。それから1ヶ月もしないうちに、日本の父が病気で倒れ、ぼくは帰国しなければならなくなった。

そういうわけで、ぼくにとっての最高のクリスマスの思い出は、同時に最悪のクリスマスの思い出でもあるのだ。ただ、それから1年以上過ぎたバレンタインデーに、ドイツから匿名でチョコレートが届いた。ぼくはすぐにギユネイの店のハリカ宛に手紙を書いたが、そもそもチョコレートは差出人がハリカだったのか、ぼくの手紙はハリカ本人に届いたのか、確かめようもなか

った。それからずっとぼくは宙ぶらりんなままなんだ。あの頃、ぼくが暮らしていたベルリンの
ようにね。

(「一番嬉しかったクリスマスプレゼント」 ordered by タリン-san/text by TAKASHINA,
Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ベルリン。1991年12月。

<http://p.booklog.jp/book/46335>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46335>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46335>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.